

令和元年6月19日現在

機関番号：13501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K04308

研究課題名(和文) 小学校への移行期における「学び」を評価する実践ツールの開発に関する研究

研究課題名(英文) Research on ECEC practice to evaluate "learning" in transitional stage between ECEC and elementary school

研究代表者

大野 歩 (OHNO, Ayumi)

山梨大学・大学院総合研究部・准教授

研究者番号：60610912

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、小学校への移行期における学びの評価について、スウェーデンを事例に文献調査と現地調査の2側面から検討を行った。文献調査では、スウェーデンにおける近年の保育改革の動向を検討した。また、現地調査から、スウェーデンにおけるペダゴジカル・ドキュメンテーションを通じた乳幼児期の学びを支える保育と、その実践評価の実態を検討した。

これらを踏まえ、スウェーデンでは、小学校への就学準備型でも、乳幼児期の生活を重視する生活基盤型でもない第三の道、すなわち、社会に生きる子どもを育もうとする生涯学習型の保育実践と学びの評価を行っていることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

国際的な保育改革の動向においては、社会的な人材への先行投資としての幼児教育という視点が強調され、OECDの政策提言も、従来のホリスティックな子ども観による保育実践を支持する傾向から、就学前の段階から知的な学びを支える実践が重視される方向へと、政策のねらいを大きく転換しつつある。

こうした中、本研究では、文献調査と現地調査からスウェーデンの保育政策と保育実践を事例として、就学前からの知的な学びを保障しつつ、子どもの学びの成果を習熟度ではなく、学びにかかわる経験とそのプロセスから捉え評価することで、移行期における学びを支えるという、新しい保育評価とその実践を明らかにしたことに意義があると考えられる。

研究成果の概要(英文)：This study was performed to examine the practice of evaluation of learning in the transitional stage between ECEC and elementary school as a case of Sweden. In this study, we discussed about the trends in recent reforms of the school system in Sweden. Also, we did the field survey to find out the actual situation of educational practice about the evaluation of learning in the transitional stage between ECEC and elementary school. Our data suggested that pedagogic documentation is used to qualitatively assess of early childhood learning in Sweden. Based on these facts, we conclude that: In Sweden, ECEC practice is based on the concept of lifelong learning, not to prepare for primary school education, nor to place emphasis on early childhood life. Therefore, Swedish educational practices are characterized as emphasizing the development of humanity, attribute and ability to live in a democratic society.

研究分野：保育学・幼児教育学

キーワード：幼児期の学び 保幼小接続 学びの評価 スウェーデン

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

わが国では、小1プロブレムの問題などから、子どもの発達や学びの連続性を踏まえた保幼小の連携や接続が大きな課題となっている。平成22年11月に報告された「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について」においては、「学びの芽生え」の時期と「自覚的な学び」の時期という発達段階の違いに配慮しつつも、両者の教育の目的・目標に連続性や一貫性をもたせて活動が編成され、それが小学校にスムーズに接続するような「アプローチカリキュラム」の必要性が述べられている。しかし同じ背景から、小学校で導入された「スタートカリキュラム」に比べ、幼児期段階の取り組みの報告はほとんどない。保育所幼稚園で移行期の学びの指導については、その是非についての議論で踏みとどまっており、具体的に育成すべき資質・能力を踏まえた目標や指導の方法について明確に体系化された実践手法も存在しないのが現状である。

2. 研究の目的

幼児期の教育から小学校教育の円滑な接続のために、幼児期における「学びの芽生え」と「自覚的な学び」を可視的に捉えるツールとして、スウェーデンで実践されている「ペダゴジカル・ドキュメンテーション(教育的実践記録)」という手法を援用し、その実践可能性について明らかにすることを目的とする。2011年からスウェーデンの就学前教育施設に全国的に導入された保育評価の手法である「ペダゴジカル・ドキュメンテーション」は、子どもが周囲との相互作用の中で、主体的にものごとを探究して知識やスキルを身につけながら“変容していく”過程を「学び」と捉え、子どもの「学び」を可視化するために用いられている評価法である。本研究では、わが国の幼児期の教育から小学校教育の「学び」の移行のために、保育者の実践評価のツールとしての「ペダゴジカル・ドキュメンテーション」の作成を目指す。

3. 研究の方法

本研究では、スウェーデンにおける近年の保育・学校教育制度改革の動向を整理する、スウェーデンの就学前学校における「ペダゴジカル・ドキュメンテーション」の活用実態調査を行う、日本における「ペダゴジカル・ドキュメンテーション」を援用した実践や日本の接続期アプローチカリキュラムへの応用可能性の検討を行うという、3つの方法によって研究を進めた。

4. 研究成果

2015年度： スウェーデンにおける乳幼児期の学びを評価する「ペダゴジカル・ドキュメンテーション」を理解するために、教育的な哲学や実践手法の源流となるイタリア・レッジョエミリア教育にかかわる国際学会へ参加し、実践者によるレクチャーや施設訪問を通じて、乳幼児期の学びを視覚化する手法や幼稚園から小学校への応用的な実践を検討した。大分大学教育福祉科学部附属幼稚園にて、移行期のアプローチカリキュラムと教育課程の作成に向けた、ドキュメンテーションの実践を開始した。具体的には、保育者による幼児の遊びのエピソード記録からその遊びにおける子どもの学びをキーワードとともに抽出し、その記録を同じ遊びごとに3,4,5歳児で並べ、一見で発達の流れが可視化できるような書式にまとめ、保育の討議を行った。これまでの研究成果を、学会発表1件と学会誌への投稿論文1本にまとめ、発表した。これらにより、保育者からの「発達の流れが可視化され、長期的な子どもの学びの展望を見る視点が培われた」という見解を得た。

2016年度： 前年度の成果を踏まえ、保育者研修を実施し、ペダゴジカル・ドキュメンテーションを踏まえた保育評価の実践に関する講義とワークショップを行った。研修後は、保育者へ幼児期の学びに関するアンケート調査を行った。これまでの研究成果を、学会発表1件と紀要論文1本にまとめ発表した。また、学位論文として本研究のこれまでの成果と課題を提示した。これらにより、保育が現在語られている保育の二元論(就学準備型/生活基盤型)の枠組みを乗り越えた「生涯学習型」という新たなパラダイムに基づいて実践していることを明らかにした。

2017年度： スウェーデン・ヨーテボリ市での現地調査を行い、計5つの就学前施設を訪問して、実践の観察や保育者へのインタビューを行った。インタビューでは、就学前学校学習指導要

領の改訂を踏まえた保育実践の変更点の有無や、就学前クラス、基礎学校との接続にかかわる活動などを含め、生涯学習の基礎としての就学前教育の在り方にかかわる保育者の声などを聞き取った。また、2018年に改訂される就学前学校学習指導要領の内容を踏まえた実践の創出や、近年の学びを強化する就学前教育改革の動向について、保育者の見解を尋ねた。実践観察では、就学前学校、就学前クラスと、それぞれの段階における実践とそこにおける子どもの姿を観察し、記録をとった。接続の実態については、就学前学校から就学前クラス、就学前クラスから基礎学校への接続にかかわる子どもの評価や移行の資料なども入手した。さらに、ヨーテボリ大学のイングリッド・プラムリン教授、ニクラス・プラムリン教授と就学前教育改革にかかわる意見交換会を行った。これら調査で得たデータを反映させた学位論文を執筆し、成果発表を行った。これらにより、就学準備型でも生活基盤型でもない、生涯学習型保育という新たな第3の保育実践アプローチを提起した。

2018年度：これまでの研究成果を学会発表1件、論文1本により発表した。これらにより、スウェーデンは、現在語られている保育の二元論（就学準備型/生活基盤型）の枠組みを乗り越えた「生涯学習型」という第3の道を歩みつつ、近年の移民の社会包摂にかかわる政策として、保育を活用しようとしている新たな施策を検討し、社会における保育の位置づけが変容しつつある事実を指摘した。

以上を踏まえた本研究の成果は、大きく二点にまとめられる。一つ目は、スウェーデンにおける移行期の学びを評価する観点とその活用法を明らかにした点にある。具体的に言えば、子どもの実態を把握する中で、リテラシーの形成にかかわる知的な学びの成果も含めた子どもの発達を評価はするが、それを子どもの学びの成果として評価するのではなく、評価し認識された子どもの実態を保育者が実践を改善するために活用するという点が、スウェーデン保育の大きな特徴として見いだされた。これは、近年の教育要領の改訂において、保育のねらいの中で就学前のリテラシーの形成を重視するような傾向が見受けられている中、スウェーデンの保育が単なる就学準備に傾かない要因の一つとして留意すべき点であると考えられる。日本においても「10の姿」など、幼児期の終わりまでに育みたい学びの姿が教育要領に示される改訂が行われた。しかし、本研究を通じて、その観点に基づく子ども理解を、子どもの学びの成果として評価し、保護者や小学校へ伝えるために評価するのではなく、保育者が自分自身の実践を改善するために用いるという、保育評価の活用法へのまなざしそのものを考える必要があることを、スウェーデンの事例から学び改善することができる。これは、今から保育評価とその実践を醸成しようとしている日本の保育において、非常に有用である。

二つ目は、スウェーデンの保育・学校教育におけるパラダイム転換を明らかにした点である。本研究の結果、スウェーデンの就学前学校における学びの目的は小学校への準備ではなく、生涯にわたる生活や人生へ還元することに置いていることが明らかとなった。これにより、スウェーデンでは就学前教育段階におけるリテラシーの形成を意識しつつも、保幼小の接続にかかわる実践やそこにおける情報提供の在り方は、就学前の学びの到達点ではなく、スウェーデン社会で生きる力をいかに育み、それを次の段階へと接続させるかという点を重視していることが示された。従来の国際的な就学前教育における学びの捉え方は、就学準備、もしくは、生活基盤という2類型によって語られていた。しかし、本研究を通じ、就学準備でも、生活基盤でもない、第3の類型がスウェーデン独自の就学前教育の特徴として見いだされ、それを「生涯学習型保育」と定義して発表したことは、今後の国際的な就学前教育における学びの議論へ新たな視点を提示するものになると考える。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

今後の課題は、保育評価を日本に援用するための具体化を進めることである。子どもの学びの成果を保育記録や要録などに記す際には、学びの到達点ではなく、学びのプロセスや質的内容に転換して記録をするような保育者の思考法とその実践方法を、養成教育や研修を通じて構築する必要があると考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

1. 大野歩 (2019) スウェーデン, 諸外国における保育の質の捉え方・示し方に関する研究会報告書,88-113, [査読無]
2. 大野歩 (2017) スウェーデンの就学前教育における科学的リテラシー能力の育成に関する研究—2011年教育改革後における保育実践の検討から—,大分大学教育学部研究紀要,38,47-62. [査読無]
3. 大野歩 (2015) スウェーデンの保育改革にみる就学前教育の動向—保育制度と「福祉国家」としてのヴィジョンとの関係から,保育学研究,53,110-125. [査読有]

〔学会発表〕(計3件)

1. 大野歩・七木田敦 (2018) スウェーデンにみる生涯学習型保育について—2018年のナショナルカリキュラム改訂に向けて—, 日本保育学会第71回大会
2. 大野歩 (2016) スウェーデンにおける幼児期の自然科学プログラムの導入について, 日本保育学会第69回大会
3. 大野歩 (2015) スウェーデン保育の動向から保育者養成の今後を考える, 全国保育士養成協議会第54回研究大会.

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕(計1件)

学位論文：大野歩 (2017) スウェーデンにおける「保育の学校化」にかかわる研究, 広島大学学位論文(博乙第4314号), 広島大学.

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：七木田 敦

ローマ字氏名：NANAKIDA, Atsushi

様 式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

所属研究機関名：広島大学

部局名：教育学研究科

職名：教授

研究者番号(8桁): 60252821

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。